



仮想空間の自己評価

SCE・Net 小松昭英

E-165

発行日

2022.11.21

自己評価、すなわち自分の名前を自然検索したところ、下記の表 1 に示す結果になった。この 6 月から 10 月にわたる 4 か月半の間に、何故このような 20 倍を超えるアクセス増があったか、思い当たることは全く無い。

表 1 自己評価調査結果

氏名	年	2022	2022	比率
	月日	10.18.16	06.01.10	
小松 昭英	検索数	28,600,000	363,000	78.8
	順位	1-4,6-10	1-7	
	アクセス数	2,965,820	191,192	15.5
Komatsu Shoei	検索数	48,100,000	2,710,000	17.7
	順位	5,7,8,9	6,7	
	アクセス数	4,612,790	142,275	32.4
合計	アクセス数	7,578,610	333,467	22.7

そこで、まず、どのような事象がアクセスを誘っているのか調べてみた。

6 月と 10 月の事項をリストアップして、それぞれ表 2 と表 3 に示す。

驚くべきことは、両表に共通する事項が全くないことである。

表 2 6 月調査

1. 小松昭英さん
2. エッセイ「偶然の連鎖」
3. KAKEN 研究者をさがす
4. 小松昭英の本
5. 小松昭英－共同研究者
6. 小松昭英古書
7. プロセスシステム設計
8. 小松昭英の書籍一覧
9. 小松昭英--
10. 仮想空間はもう一つの現実

表 3 10 月調査

1. CiNii Articles
2. ビジネスエンジニアリング序説
3. ビジネスエンジニアリング原論
4. CiNii 論文－ビジネスデザイン序説
5. -- (該当なし)
6. 言葉の壁の崩壊
7. NPO 法人ものづくり APS 推進機構
8. 2012 年度版総合知学会
9. 2014 年度活動報告
10. 化学工学会-Vol.78 No.3 (2014)

ここで、従来このようなエッセイを執筆する際には利用することはなかったが、携帯電話の検索能力を調べることも兼ねて、『携帯電話 (NTTdocomo) による自己評価』をしてみると、表 4 に示す結果になった (2022.11.01/10am)。

残念ながら、パソコンの場合に得られた「検索数」(表 1 参照) は表示されてなかったが、それなりに参考になりそうである。すなわち、表 4 の上位 3 項目が表 2 と同じだが、表 3 とは全く異なっている。タイミングは表 2 より表 3 の方が近いにも関わらずである。

次に、エッセイあるいは論文の個々について、パソコンでアクセス数を調べ表 5 に示す。

表 4 携帯電話による自己評価

1. 小松昭英さん
2. エッセイ「偶然の連鎖」
3. KAKEN 研究者をさがす
4. 事例ビジネスアセスメント
5. エッセイ「仮想空間はもう一つの現実」
6. 2016 年度 PMAJ 表彰式
7. サイバースペース再考
8. ビジネスモデルの構造
9. ビジネスモデルの構築
10. マーケティングとビジネスモデル

表 5 論文アクセス数

No.	自然検索結果	年	2022	%
		月/日/時	11.01.16 (火)	
1	エッセイ「偶然の連鎖」	検索数	563,000	
		順位	4	
		アクセス数	26,236	0.01
2	ビジネスエンジニアリング 原論	検索数	286,000,000	
		順位	1	
		アクセス数	60,403,200	25.0
3	ビジネスエンジニアリング 序説	検索数	285,000,000	
		順位	2	
		アクセス数	30,352,500	12.6
4	CiNii-ビジネスデザイン 序説	検索数	2,120,000,000	
		順位	7,8,9	
		アクセス数	130,804,000	54.1
5	言葉の壁の崩壊	検索数	585,000,000	
		順位	5	
		アクセス数	20,007,000	8.3
アクセス数合計			241,592,936	100

意外にも、「エッセイ『偶然の連鎖』」(表 2 では 2 位)は論文としては、相対的に低位のアクセス数に甘んじている。

次いで、「言葉の壁の崩壊」(表 3 では 6 位)も、「エッセイ『偶然の連鎖』」ほどではないが低位である。

これに対して、「CiNii-ビジネスデザイン序説」が断トツで 1 位である。

改めて、ビジネス関連の 3 論文をまとめて表 6 に示す。

この 3 つの論文のアクセス数は、それぞれ 6 千万、3 千万、1 億 3 千万で、合計 2 億 2 千万を超えている。何れにしても、この日本語の論文が我が国の国境を超えて注目されていることを示していると言えよう。

そこで、これらの論文の冒頭に記載されている「要約」を以下に示す。なお、エッセイ「偶然の連鎖」と「言葉の壁の崩壊」は、改めて説明するまでもないと考え除外する。

- ・ビジネスエンジニアリング原論-エンジニアリングとそのサイエンス(2018.12)

表6 ビジネスエンジニアリング論文アクセス数

No.	自然検索結果	年	2022	%
		月/日/時	11.01.16 (火)	
1	ビジネスエンジニアリング 原論	検索数	286,000,000	
		順位	1	
		アクセス数	60,403,200	27.3
2	ビジネスエンジニアリング 序説	検索数	285,000,000	
		順位	2	
		アクセス数	30,352,500	13.7
3	CiNii-ビジネスデザイン 序説	検索数	2,120,000,000	
		順位	7,8,9	
		アクセス数	130,804,000	59.0
	アクセス数合計		221,559,700	100

従来、企業システムが、生産システム、あるいはビジネスエコシステムの形成という状況認識抜きで議論されてきた。さらに、企業システムの構築に当たっては、コンサルタントあるいはコントラクターの視点から議論されて

きた。オーナーの視点から議論されてこなかった。そこで、新たな視点に立って、ビジネスエコノミクス、企業組織論、さらに急激に進歩しつつあるコンピューティング技術を援用する新たなビジネスエンジニアリングを検討する。

・ビジネスエンジニアリング序説—論考デジタルトランスフォーメーション

情報通信技術の進歩が、新産業革命に引き続いて個々の企業に「デジタルトランスフォーメーション」と呼ばれる企業変革をもたらすと言われている。この新産業革命からデジタルトランスフォーメーションへの移行について、ビジネスエンジニアリングの視点から、アクセス数順に考察する。

・CiNii-ビジネスデザイン序説

これは、ビジネスエンジニアリング序説～論考ビジネスデザインに該当するものと考えられる。もし、そうだとするとその要約は以下の通りである。

ビジネスモデルやビジネスデザインあるいはビジネス設計という言葉がよく使われているが、これらの関連深いビジネスアーキテクチャという言葉はあまり使われていない。あらためて、これらの言葉の相互関係も含め、ビジネスデザインのビジネスマネジメントサイクルでの位置づけとその内容について論考する。

ここで、気になるので、CiNiiを調べると、国立情報学研究所が提供する「CiNii (NII 学術情報ナビゲータ) は、論文、図書・雑誌や博士論文などの学術情報で検索できるデータベース・サービスです。」とある。そうすると、この論文はこのサービスに取り込まれたようであり、異常とも言えるアクセス数を記録することになった要因の一つになったものと考えられる。大いに感謝するものである。

さらに、改めてこの3論文の合計が2億を超えるアクセス数を記録した要因を、上述の論考あるいは従来の筆者の主張との重複あるいは我田引水になることを恐れずに考えてみたい。

先ず、デザインという言葉は、文系あるいは理系に拘わらず、その認識に差はあつて

も、何の違和感も持たれないのに対し、エンジニアリングは工学と翻訳され恰も学術であるかのように、文系であれ理系であれ、理解されているのではなかろうか。元来、工術と訳されてしかるべきなのに、工術と言う言葉はあっても、エンジニアリングという意味で使われるのは稀である（筆者(2013)¹）。このことは、エンジニアリング・エコノミクスの存在の余地を否定することにも繋がっているのではなかろうか。

また、一般的には、ビジネスというと事務あるいは実業と翻訳され(2002)²、一方商業というと商品を売り買いし利益を得る仕事としている。また、コマースというと一般向け辞書には収録されていないが、commerce は英和辞典では商業あるいは貿易と翻訳(1980)³ (1997)⁴されている。ただし、経営革命大全 新装版(Boyett J,H & Boyett J.T)⁵では、冒頭に「今日のビジネス界」ではと書き出しており、「商業界」とは言っていない。

一方、business は、英和辞典（小稲義男(1980)、前出）では、①実業、商業に加え、②事務、業務、③商取引、商売、④店舗、会社、⑤仕事、本務などと訳されている。すなわち、ビジネスという時は、商業よりは多義に亘っていると見えよう。

筆者は「ビジネスエンジニアリング」という時、意識したことは無かったが、「コマース」ではなく、「ビジネス」を、またビジネスモデルと言う時、定義していたわけではないが、「個々の企業は、それぞれ固有のビジネスモデルを持つ」と考えていたと言えよう（筆者(2022)⁶）

このような基本的な視点あるいは考え方が、筆者の論文が海外も含む多くの人々の注目を浴びる要因になっていると思うが、果たして的確な洞察になっているかどうかの確信はない。

文献

1 小松昭英、工学とエンジニアリング、蔵前技術士会 25 周年誌、pp.35-39、蔵前技術士会、2013

2 三省堂国語辞典 第五版（小型版）、三省堂、2002

3 小稲義男、研究社 新英和大辞典第 5 版(1980)、研究社、1981

4 長谷川啓之、最新英和経済ビジネス用語辞典、春秋社、1997

5 Boyett J, H & Boyett J.T, The Guru Guide-The Best of the Top Management Thinkers, John Wiley & Sons, 1998

（金井壽宏監訳、経営大全 新装版—世界をリードする 79 人のビジネス思想、日経ビジネス思想、日経ビジネス人文庫、2014）

6 小松昭英、論考 ビジネスモデル、化学装置、工業通信（投稿中）